入選

井上　亜友美（いのうえ　あゆみ）　東京純心女子中　3年生

作品名：薬物依存の怖さ
図　書：ほんとうの「ドラッグ」

世の中で一番怖いもの――それは「依存」だ、ということを知ったのはこの本を読んでからだ。薬物がいかに人間の性格や人生を地獄の底へと引きずりこむか、最初の入り口は「好奇心」ではないだろうか？「今より簡単にやせられるよ。」「勉強しても眠くならずに集中出来るよ。」とても魅力的な囁きだ。しかし、どんなものだろう、というほんの少しの興味で薬物に手を染めた瞬間、人は悪魔と契約する。覚醒剤、大麻、コカイン、ＭＤＭＡ。今まで、全く自分には関係ないと思っていたが、実は私達のすぐ側にありいとも容易く手に入る事を知り驚いた。

作者がドラッグを始めたきっかけは「虫歯」だった。仕事中の歯の痛みに耐えきれず、安易な気持ちで勧められるままに覚醒剤を打ってしまった。嘘のように痛みがとれ、頭が冴え渡った。しかし、ここからがドラッグの本当の恐怖の始まりだった。味を占め何度か使用するとみるみるうちに体重が減り、無気力になった。幻聴、幻覚が現れ異常な行動をとる。しかし、覚醒剤を打つと正常な生活に戻る。まさに負の循環である。これではいけないと「明日こそやめよう」と何度も思うが悪魔が顔を覗かせ、いつになっても生まれ変わる為の明日はやって来ない。絶望のどん底にいる作者が立ち直るきっかけになったのはアルコール中毒の神父「ロイ」氏との出会いである。彼の勧めによりアルコール依存症のミーティングに参加し自分と同じように「依存」で悩んでいる人が沢山いると知り少し気持ちが軽くなるが、一度取り憑いた悪魔は簡単に出ていってはくれない。とうとう拘置所に入れられるが、面会に来てくれるのは神父ロイ氏だけで、家族も友人も誰も面会に来てくれはしなかった。社会からも見捨てられ、孤独と絶望の中で「生きる」という事が本当に嫌になってしまったと思う。と同時にロイ氏に対する「信頼」や「友情」が段々と生まれたのではないだろうか。「ドラッグ」をやめるには刑務所に入るしかないと思った作者は裁判長に願い出る。「どうぞ、私を刑務所に入れて下さい。」と。しかし判決が下り「刑務所という自由のない場所で、自分の意志によらずに覚醒剤をやめさせられるのではなく、覚醒剤を使える自由の中で自分の意志でやめることのほうを、わたしはあなたにしてもらいたい」私は、この言葉に胸がつまった。「あなたを信用します。自分の意志を強く持ち、立ち直り、社会復帰を果たして下さい。その日を待っています。」裁判長は本当はこのように言いたかったのではないだろうか。もし私が当事者でこの場にいたら安易な気持ちでずるずるとドラッグをやってしまった

自分を後悔し、父や母、友人を想い泣き崩れてしまうのではないだろうか。
「ダルク」。私も少しは知っているがこの本を読んでみると今までとは違う深い考えに包まれた。ここの扉を叩く人は、身体も心もボロボロに傷つき、藁にもすがる思いでやってくる。主催者である作者が以前、薬物依存症であったため、彼らの一番のよき理解者となり偏見を持たず、本当に立ち直って欲しいと切に願う気持ちが改めて私の心に響いた。もし私の心に木枯しが吹き孤独と絶望で生きるのが辛くなり、とても悲しい事だけれども悪魔の誘いにのってしまい薬物依存症になったら「助けて。」と声をあげて素直に周りの人に言えるだろうか。「自分は駄目な人間だから誰にも相手にしてもらえないだろう」と諦めるかもしれない。しかしそれではいけない。恥ずかしがらずに恐れずに信用できる大人に相談する事が悪魔から逃れる第一歩なのだ。自分を変えるのは他人ではない。自らの意思を強く持ち信頼すること――。それが人生においての最大のパートナーとなるのだ。
現在、諸外国では薬物依存を犯罪とみなすのではなく、一生をかけて治療していく病気であると国民全体が考える国が増えている。このように社会全体で救おうという意識を日本でも持つべきだ。という作者の考えに私は賛成だ。そのためには私達が一人でも多く薬物依存についての正しい知識を持ち、理解を深め日本の社会全体が、その人のためにどのような手助けができるのだろうかと考えていく方向に進む事が大切なのではないかと思う。